

僕は そうだよね と言う

僕には昔 眠るときに

おはようという癖があった

そうしないと怖くて

眠れなかったのだ

そのせいで家族は

毎晩うんざりしていたし

泊りに来た友達の

眠りを妨げてしまったこともある

笑いすぎて眠れなくなった友達

は理解できない と言い

いまでもその話を蒸し返す

自分の恐怖を押し広げて

ひとの恐怖を推しはかると

僕は殺人鬼にならない

「僕は殺人鬼だ」

「殺人鬼は包丁を持っている」

「包丁を持ったまま書店で働いている」

「僕はもう三年以上書店員だ」

カウンター脇で本の発注をしていると 子連れの男性が声をかけてくる 息子が料理をしてみたいと言うんですが 簡単な本はありますが 子どもは小学校中学年くらいの人らしい 大人しそうな男の子 この本なんてどうでしょう お子さん向けに作られているので ふりがなが多くて説明も丁寧です

男性はその本を買う

僕は本を紙袋に入れて渡す

そのときこっそり包丁も入れておく

家に帰ってから子どもは

本と一緒に包丁を取り出す

嬉しそうな顔をする